

- 1 特集
ミュージアム思考ってナニ？
アートで考える！
- 8 ことばの世界
ひとつの単語の有無による大きな違い
- 10 かずとかたちの世界
正解がない問い
- 12 日能研 低学年の学びワールド
学びをつなげるファンタジー
予科教室
学びとともに学ぶ仲間と出会う
ユーリカ！きっず
科学者講座
- 14 子どものためのセレクト・ブックショップ(ちえの木の実)がオススメする
読書が好きになる本
夢中になれる世界
- 16 野外に出て学ぼう！
教育キャンプから考える
- 17 ジェムズの豊かな学び
『カエルの算数』@お茶の水校
- 18 親を学ぶ
今ここでともに過ごす時間を大切に
- 20 「^{まなぶ}学び家」レベルアップ
つながる、つなげる、つないでみる



何をするにもふさわしい秋。美術館や博物館へ出かけて、さまざまなアート作品を見るのもいいですね。

今回お話をうかがったのは、東京上野で「Museum Start あいうえの」プロジェクトを立ち上げ、新しいミュージアムの形を提唱している、稲庭彩和子さん。

アート作品をただ鑑賞するのではなく、「ミュージアム思考」を意識すると、主体的に考える姿勢が身につくようになるとのこと。いったいどういうことなのでしょう。

〈Museum Start あいうえの〉

東京の上野公園に集まる美術館や博物館など、九つの文化施設が連携して取り組んでいる、6歳以上の子ども・若者とそのファミリーや学校を対象としたラーニング・プロジェクト。東京都美術館の学芸員と東京藝術大学の教員で構成された企画運営チームが推進役となり、ミュージアムにある本物の資料や作品をよく観察し、シェアすることを通して、人とモノとの「新しい出会いの仕組みづくり」を進めている。



<https://museum-start.jp>

◆今回お話をうかがった人

稲庭 彩和子さん



2011年より東京都美術館のアート・コミュニケーション事業の立ち上げを担当し「Museum Start あいうえの」や「とびらプロジェクト」などを企画・運営。展覧会として「キュッパのびじゅつかんーみつめて、あつめて、しらべて、ならべて」(2015)など。共著に『美術館と大学と市民が作るソーシャルデザインプロジェクト』(青幻舎、2018)、『コウベンちゃんとまなぶ名画の世界』(KADOKAWA、2021)、『こどもと大人のためのミュージアム思考』(左右社、2022)など。

国立美術館本部 主任研究員。(2022年3月まで東京都美術館 学芸員)。ロンドン大学UCL修士修了。

取材協力/東京都美術館 学芸員 熊谷香寿美さん



表紙イラスト:大原そう

「Museum Start あいうえの」で核となる5つの「ミュージアム思考」

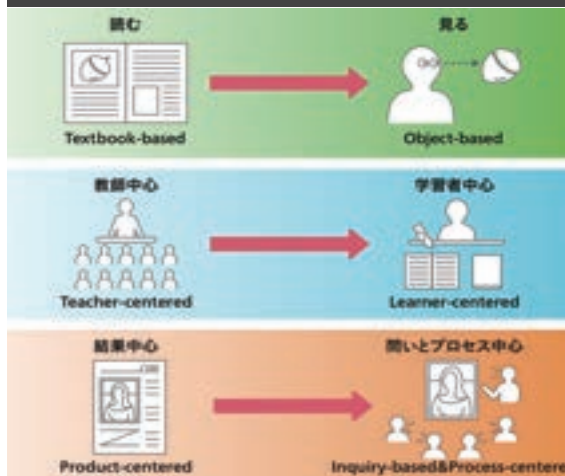
「Museum Start あいうえの」では、ミュージアムでモノを見て考えを深める体験を「ミュージアム思考」と名付けていますね。この「あいうえの」の活動で大事にしているのは、どういふものなのですか?

稲庭 「あいうえの」では、オブジェクトベース・ラーニングという「物を見る」ことから始まる学びをコンセプトにしています。

たとえば「木々との対話」というテーマの展覧会なら、その展示作品をじっくり見るといふアプローチだけでなく「実際の木を描いてみよう」

ミュージアム思考	
視覚的思考	モノを見ながら考える。全体性を捉え、比較や分類し思考を深める。
身体的思考	身体感覚を総動員して考える。質量のあるモノを、見るだけでなく身体感覚を開いて思考する。
共在的思考	他者の感情や経験を理解し想像する。モノを見ながら対話し、他者と共に世界を再発見する。
超越的思考	日常的な時空を超えて深層の時間に接し新たな発見や普遍的な価値へのつながりを見出す。
持続的思考	答えが一つではない問いに対し、すぐに結論を求めず、時間をかけて問いをもち続ける。

「あいうえの」におけるワークショップの特徴



「子どもと大人のためのミュージアム思考」p123より引用

というワークショップもあり得るわけです。実際に描いてみることで、観察能力が上がり、作品をじっくり鑑賞できるようになります。「モノ」を集めたり、分類したり、並べたりする体験がミュージアム思考の一つでもある「視覚的思考」につながっていきます。

21世紀型ミュージアムの価値とは?

「来館者が展示の説明を理解する」よりも「来館者が展示をどうとらえるか」に重きが置かれているのは意外でした。教育の世界でも、「先生の話を理解する」から、アクティブ・ラーニングと言われるように、学習者(ラーナー)側が積極的に学ぶための工夫に焦点が当たってきてい

ますが、なぜこの発想に至ったのでしょうか。
稲庭 「あいうえの」で大切にしているのは、参加している一人ひとりが自分の感じ方を表明できる、個々が尊重された学びの環境です。このプロジェクトは子どもと大人が共にアートや文化財に「出会い、見て、考え、シェアする」ことを通じて、自らが文化の担い手になっていくことが目指されています。社会の中で一人ひとりが言葉を持って文化に参加していく「市民の学び(シチズンシップ・ラーニング)」でもあります。

美術館に集まる作品や文化財には、多様な人の記憶が宿っています。ですから、モノそのものを保存することはもちろん大切なのですが、同時にそのモノに宿る記憶や考えを人々の間でシェアして、価値をつくっていく活動もミュージアムの大きな役割です。今までは専門家の言葉を正しい答えとして、来館者はそれをいわば鵜呑みにするような状況があって、それを見て、専門家ではない「私」の存在は置き去りにされてきました。このプロジェクトでは、子どもも大人も自分の考えや感じ方をもっと伝えて、対話を通してアートや文化財の価値づくりに関わる、創造的な学びの場をつくりたいと考えてきました。

観察力が上がる「問い」と「声かけ」

「あいうえの」には、「あいうえの」アート・コミュニケーション」といふ存在がありますね。解説し

たり質問に答えたりするのはなく、子どもに寄り添いファシリテーター的に関わるのはどうしてなのですか?

稲庭 ファシリテーター的な関わりが、その子どもの強みを一番引き出すからです。たとえばとびラーは、事前に「聞く力とは何か?」という問いを学んでいて「聞く力」が高く、聞いてくれる人がいることで子ども達は伝えようと言葉を探し思考が深まるのです。思考が促進されるために大切なことをよく理解している大人が子どもと一緒に冒険し発見していく。伴走してくれる大人がいるというのは大きいですね。

——とびラーは、子どもにどのような声かけをするのですか?
稲庭 ラーナーに合わせて寄り添うのが基本ですが、まさに「ミュージアム思考」の五つの側面が促進されるような問いを考えています。展示物を前にしながら、「とびラーが子どもにこの絵の中でどんなことは起きていると思う?」「とか」「どこからそう思ったの?」「という問いかけをすることがあります。子どもは初め緊張していても、次第にいろいろなことを話してくれるようになります。

とびラーは子どもが「あいうえの」に話した言葉も聞いてあげたいよと、話してくれた内容を否定せずに受け止めることを大切にしています。子ども達はあいうえのの自分の自分を受け入れてくれる「あいうえの」の場所「あいうえの」の思考をめぐらせばいいかなと、そこへ「とびラー」の「聞く力」



によって自分の感じたことを思うまま口にして、他の人が感じたことの違いを味わい、分かち合うことができるようになります。
——展示物を見る前に「ミッションカード」を渡すのもあるそうですね。
稲庭 そうです。モノを見て、楽しくて学びにつながるコツに、観察する際にフォーカスするポイントを決めてみるというのがあります。例をあげると、展示を見る前に渡す「ミッションカード」には、たとえば「赤を探せ!」と書かれています。カードには印刷の色味の確認に使う色チップが数種類貼ってあり、単に赤といっても実はいろいろな赤があることがわかります。多様な

「赤」を意識して展示を見てみると、ふだんは気がつかない発見ができます。これは4年生くらいまでのミッションに使います。小学校高学年では「100年後の未来に遺したいモノは何?」とカードに書かれていることもあります。自分一人の生命を超えて、想像力を働かせることができます。書籍『子どもと大人のためのミュージアム思考』の中では「超越的思考」と紹介しています。

——先ほどのいろいろな赤の例のように、小さな差異に気がつくようになり、少しずつ得られる情報量が増えてきます。同じモノを見ても解像度が高くなるのです。これは「モノを見ることがからの学び」の特徴でもあります。親子と一緒に出かけると、お互い発見したポイントを報告し合うのもいいですね。二人で合わせて四つの瞳で観察して二つの頭で考えることができるので、それを伝え合うと視点が多様になって、学びが深まります。

とびラーは子どもが「あいうえの」に話した言葉も聞いてあげたいよと、話してくれた内容を否定せずに受け止めることを大切にしています。子ども達はあいうえのの自分の自分を受け入れてくれる「あいうえの」の場所「あいうえの」の思考をめぐらせばいいかなと、そこへ「とびラー」の「聞く力」

想像を広げられるのです。低学年のお子さんなら、「親が」どこから思ったの？」「と根拠を聞いてあげるのもおすすです。子どもであっても自分の知識や経験と作品を行ったり来たりしながら、見る解像度を上げて多義的にとらえることができるようになります。

アートとの出会い方は多義的だから「持続的思考」がしやすい

——まだ既成概念にしばられていない低学年のうちから、多義的なアートや文化財に触れられるミュージアムで、観察を通して思考する体験はとても大切なのです。

稲庭 そつです。小学4年生ぐらいまでが、ミュージアムデビューに最適な時期です。観察するのが楽しくてしょうがないんですよ。

——子どもは身体全体で世の中を理解しようとしていますが、大人は知識が邪魔をして、そのものを見るのができないような気がします。

稲庭 それには、二つの理由があります。まず、私たちはふだん目に見えるものを、すべてじっくり見るといふことをしないからです。

たとえば、雑音の多い部屋にいても、だんだん雑音が気にならなくなるように、私たちの聴覚は「無視する音」と「意識して聞く音」とを自動的に取捨選択しています。視覚も同じで、「見る必要がある」と思われるものを自動的に見ているのです。

もう一つの理由は、生きていく過程で身につく「Well-being(ウェルビーイング)」にもつながっているのです。

ミュージアムへ行き本物に触れることの意味

——子ども達がアートに触れるときに、たとえば本や映像などのメディアを通して触れるのと、実際にミュージアムに足を運んで本物に触れるのでは、どのような違いがありますか？

稲庭 メディアを通して見るの意味がありますが、やはり実物を体感して見るのは全く違う体験だと思います。それは先ほどの話ともつながりますが、やはり、実物が持っている情報量はケタ違いに多いのです。

本物を目の前にしたときには、目だけじゃな



けてきた「常識」による妨げです。人は成長過程でさまざまな経験を積み、目に映るものを「何であるか」を瞬時に判断する能力を高めていきます。そうした経験が、その人の視覚からの常識をつくり、その常識は先入観や偏見となって自由にモノを見るのを妨げることもあります。つまり私たちは日常的に、自分にとって都合のいいものを自動的に取捨選択して見る、「エゴ認識モード」を稼働させているのです。

ミュージアムでは、そうした「エゴ認識モード」をストップさせ、「ゆっくり把握モード」を起動させる必要があるのです。「ゆっくり把握モード」が「観察」の極意とも言えるのです。

やはり大人側の「答えを急ぎ過ぎる」教育の弊害があって、このあたりは、五つのミュージアム思考の一つでもある、「持続的思考」につながっています。自分がとらえた答えは実は真実の一端でしかないから、それを持続して考え続ける。何度も考えたいくなる、そういう持続的思考が文字よりも「モノ」を扱うオブジェクトベースド・ラーニングのほうがいやすすいんです。多義的なものなので続けて見ていられるのです。名画は何度見ても見る度に意味が生まれるから、何度も見たいくなる。だからこそ、モノの多様な見方を受け入れやすい低学年の時期にミュージアムに行つてほしいと思います。

——「アートは答えが一つではない」「そして多義的であることを知ることも重要なのですね。」

稲庭 作品には研究者が明らかにしてきた歴史なく、皮膚感覚とか空間性とか、そういうことも含めて情報を受け取っていて、やはりキャッチできる情報が圧倒的に多い。ですから、思考が広がるフックがたくさん増えるので、それだけ思考が深まりやすいですね。

事前準備をして見るほうが解像度も上がりやすい

——事前準備をして自分の視点を持って作品を見ることについては、どのようにお考えですか？

稲庭 学校の校外活動で来られる際に、事前の情報は何もなく実物に出会うほうが、感動がドーンと来ていいと思っっている先生は多いですね。でもそれはそうでもなくて、事前に印刷物で目にしていたほうが、実物を見るときの集中力が高まるのです。

認知心理学的にもいろいろな実験がされていますが、作品を複数見て話し合っていて、いろいろな意見があることも知り、視点も得てからなら一人で見るというのが一番深まるように思っています。

——事前の準備でオススメの方法はありますか？

稲庭 一般的なおすすめ全般については、次のウェブサイトを参考してください。[https://museum-start.jp/program/parents]

低学年のお子さんを持つご家庭におすすしたいのが「トイレ美術館」です(笑)。作品画像を複数用意します。これは絵葉書でも、展覧会のチラシや新聞記事を切り抜いた作品画像でも良いのですが、子ども自身がこの画像から好



子ども達がミュージアムを楽しく活用するための「ミュージアム・スタート・パック」

や、それが大切にされ残されてきたストーリーがあります。しかし、基本的に作品を目の前にしたとき、その作品への関心や理解は、その見ている人の認知力に委ねられているのです。ては認知力はどうようなときに上がるかという、その人が全面的に肯定されて、その人の経験値や知識がフル活用されている状況があるときなのです。ある人がある作品と出会って作品をじっくり見ることができると、満足感を得ることが多いのですが、これは作品をじっくり見るプロセスの中で、自分の経験や知識と作品を行ったり来たりして認知力が高まり、自分の存在を明確にめることになるからなのだと思います。作品の鑑賞は、実はよりよい生き方をしようとする

きなものを選んで、トイレの中の壁に展示してもらいます。子ども自身が画像を選ぶところが大切です。毎日トイレに行くたびに作品を目にするので、いつの間にか知っている絵になるんですね。そして「今度あの絵を美術館に見に行こう！」となると、子どもはたいてい「見てみたいかな……」という気持ちになります。ミュージアムが子どもにとって「連れて行かれる」場所ではなく「行きたい！」場所になっていると、意欲が上がって観察力も上がるのです。また、実際のミュージアムでは、その子どもにとらえたものをまずは全面的に受け止めてください。客観的に見えていることを言葉にしていき、どこからそう感じているかという主観的な思いや根拠を聞いてみてください。その子どもを経験や知識とつなげて理解が進むと、モノを見るのが楽しくなり学びにつながります。

博物館の意外な楽しみ方が満載!!



『子どもと大人のためのミュージアム思考』
「Museum Start あいうえの」の取り組みについてもっと詳しく知りたい方は、ぜひ読んでみてください! 私たちはまだ美術館・博物館の楽しみ方を知らない!? モノをよく見て思考を深める、ミュージアムならではの体験を紐解く1冊
左右社(2022年) 1,980円(税込)

ミュージアムで学ぼう! 自分の受け取ったものを “表現”する!

「あいうえの」プロジェクトに参加した
小学生が作成した〈冒険ノート〉

「あいうえの」プロジェクトの〈冒険ノート〉は、文化施設で体験したことや発見したことをスクラップブックのように記録します。自分の言葉や絵で観察や鑑賞したときの気持ちや考えたことを書き留めると、今まで気づいていなかった、自分の興味や関心が浮き彫りになります。書くこと＝表現することを通して、資料や作品との出会いの体験がより意識的なものとして心に残ります。表現することの源泉は、実は「何をどう見ているか」という鑑賞にあります。表現と鑑賞は表裏一体なのです。「私がとらえたこと」の解像度が高いと、表現が生まれてくるのです。「冒険ノート」のように見たものを記録するのは、解像度を上げて観察力を磨くのにとても良い方法なのです（稲庭さた）。

